

七、テスト化の方法

村山貞雄

- 19 ほかの子供の誤りや、まちがいを指摘する。
- 20 母親のように他の子供をかわいがる。
- 21 ほかの子供に過ちをしたらおわびをいう。
- 22 男の子とだけ遊ぶ。(男の場合)女の子だけと遊ぶ(女の場合)
- 23 自分のしたことに責任を負う(自分のあやまちをごまかそうとしないのでわびたりそのつぐないをしようとする)。
- 24 ほかの子供のことをほめて話す。
- 25 人の上にととうとする。人をひっぱって行こうとする。
- 26 大人がいてもいなくても決ったことはちゃんとする。(学校、幼稚園、家庭で)
- 27 まかされたことを責任をもってする。
- 28 友達仲間から馬鹿にされたりのけものにされたりする。
- 29 自分のことを自分の名前という。(例えば太郎ちゃんは！)
- 30 大人にいいつけずにはほかの子供の誤りを訂正してやる。
- 31 ほかの子供の遊んでいるのをじつと見ている。
- 32 よその子供にさわったり又は押したりする。
- 33 自分のものをほかの子供がとろうとすると荒々しくひっぱる。
- 34 ほかの子供の言葉をまねていう。
- 35 大人の動作のまねをする。(例えば新聞を読んだり掃除をしたり等のまね)
- 36 わがままである。
- 37 御飯を食べさせてもらおう。

テスト化の必要

幼児の発達の規準は、以上のようにして調査され、各質問について、三歳、四歳、五歳、六歳の年齢ごとに通過率の統計がおこなわれたが、これをテストの形式になおして、標準値をだしておく、利用する人々に便利であるので、そのテスト化が計画された。

テストの形式

テスト化は、運動機能、ちえ、情緒、社会性の四つの部門について、おのおのおこなうが、この四つの部門はできるだけ形式の統一をはかるようにした。

この四つの部門を総合して、総合発達値をだすことは、このようにしてだされた発達値のもつ意味について、問題があり、また総合する場合、四つの部門の重さについても議論のあるところであるが、一応この四つの部門をおなじ重さにし、その合計得点をもって、総合発達値を出し、これを幼児の総合発達の標識にしようとした。

問題の作成

テスト化のために、まず各部門について、調査問題の通過率をながめた。その結果運動機能と知的問題は、問題による難易があきわ

か、年齢が進むにしたがって通過率がほとんどすべてあがっているのに、問題を通過率(難易順)によってならべなおした。

情緒と社会性は、年齢による通過率の上昇が緩慢であり、通過率に凹凸のあるものも多く、また年齢のすすむにしたがって、通過率が低下しているものもみられた。

この結果について、次の様な処理をおこなった。

- (一) テストの問題にならぬものは、問題をすてる。
 - (二) テストとして不適当なものは、問題をすてる。
 - (三) テスト問題として不適当なものは、問題の形を変える。
- (四) 通過率が年齢が進むにしたがって、上昇のみしているか、または下降のみしている問題を選び、あがったり、さがったりしているものをすてる。

あがったり、さがったりしているものは、それ自身にはおもしろい意味が認められるものもあったが、問題の文章の内容がもつと限定される凹凸がなくなることが予想されるものであり、テスト問題としては不適当と考えられたからである。

以上の原則にしたがって問題を取捨修正した。その結果、つぎのようなテスト問題が作成された。

テスト問題

(30 頁掲載の知的発達テスト問題を参照)

年齢別テスト問題配当のころみ

この結果を、発達値を算出するために、三歳、四歳、五歳、六歳の四つの年齢に問題を配当することをころみた。

この場合、六十%以上九十%未満の通過率をもって、各年齢の間

題として配当した。

その結果、運動機能とちえの部門は、各年齢の配当が適當であったが、情緒と社会性の部門は四つの年齢に配当することは、不適当であることがわかった。

四つの部門のテスト形式をできるだけおなじ形式にすることは、はじめに述べたようにテスト化の根本方針であるので、年齢段階に問題をわりあててする方法は、これをとらないことにした。

点数式採点法の採用

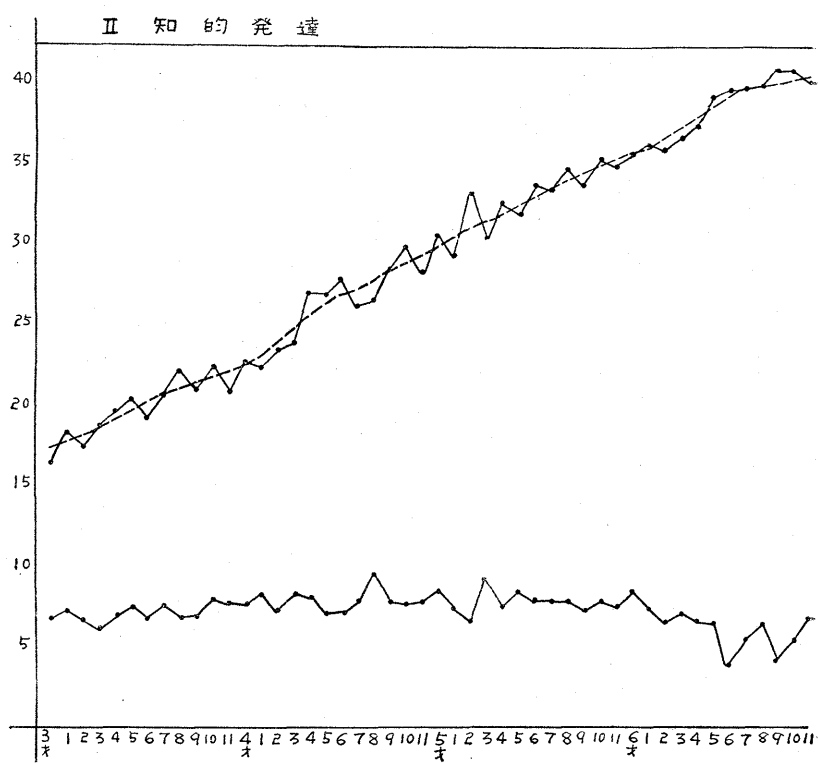
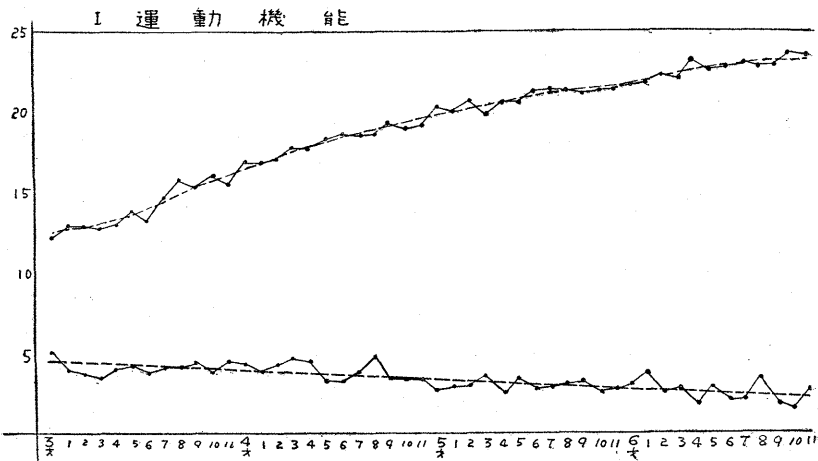
そして、各部門を生活年齢ごとに得点に換算して、その平均値を各生活年齢にわりあててする方法をころみた。

そのために以上のテスト問題について、あらためて全被調査者の各個人の得点を調査しなおした。

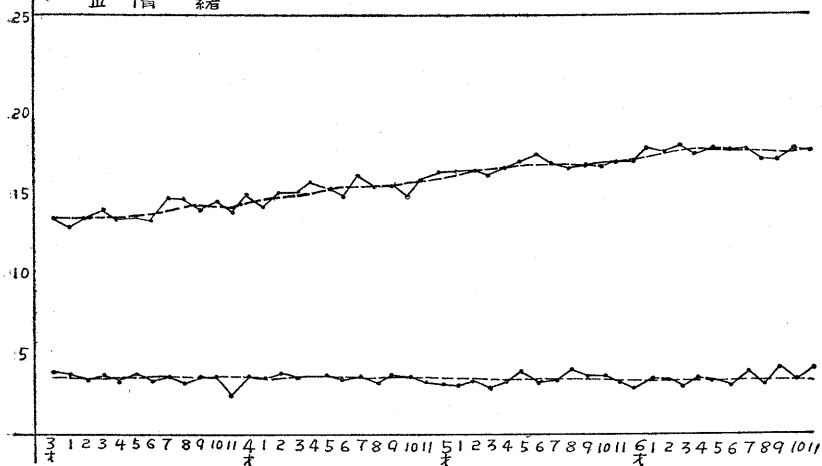
得点の上昇

得点の調査法は、運動機能と知能発達は、「できる。」を プラス とし、「できない」、「はっきりしない」、「わからない。」を マイナス とした。情緒と社会性は「非常にたびたびする」と「時々する」を プラス とし、「まったくしない」を マイナス とした。

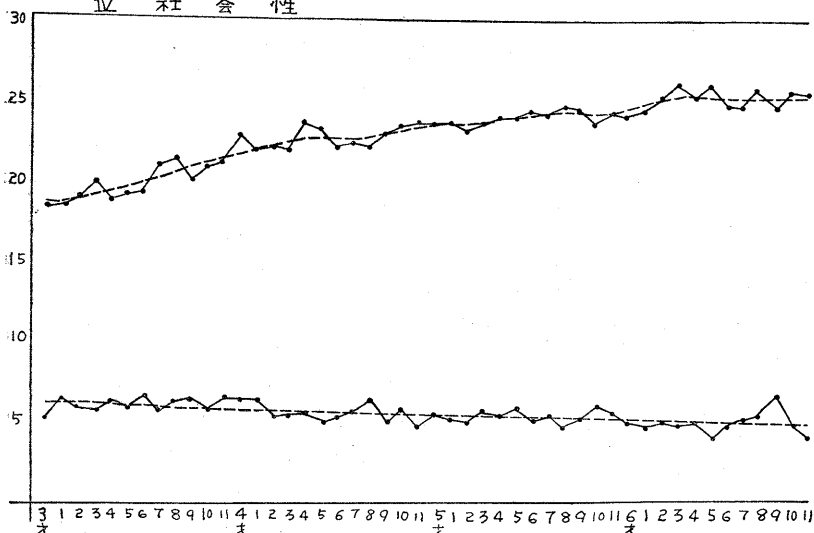
情緒と社会性において、非常にたびたびすると、時々する、と全くしないのいずれを プラス とし、いずれを マイナス とするかは問題のあるところである。テストの利用率の上からいって、いずれかの一つと二つに分けることはできれば望ましいことであるが、このように統一した場合、理論的には、むしろ「非常にたびたびする」のみをもつて プラス とするほうが、合理的であるように考えられる。しかし、通過率の見地から以上のように決めたのである。



III 情緒



IV 社会性



プラスマイナス
十と一の関係は十が一つ
について一点としたが、情緒
と社会性では年令がすすむに
したがって下降するものがあ
るので、問題によって一が一
つについて一点としたものが
情緒の部門で十一問、社会性
の部門で八問ある。
発達原表の作成
このようにして、四つの部
門と総合発達について生活年
齡別、性別に得点の算術平均
値と標準偏差値を算出した。
生活年齢は、各月ごとに分
けたが、その算出法は、生年
月日から調査年月日をひいて
一ヶ月未満の日数を切りすて
た。算術平均値と標準偏差値
は小数点下三位までだして、
四捨五入した。
さらに、発達指数や発達偏
差値をだすために、男女合計
について、生活年齢ごとに算
術平均値と標準偏差値をだし

た。(グラフ参照)

発達修正表の作成

発達原表について、算術平均値は、これを五点修正法で二回平滑化した。

標準偏差値は、原表のグラフによって、知的発達をのぞいて他は直線とみなして一次式によった。知的発達は二次式と一次式をつかって関数化した。結果をグラフで示すと、図の破線のようになる。

発達偏差値の算出

この修正表から、各生活年齢ごとに発達偏差値を算出した。

ただし、情緒のみはその発達状態が至って緩慢であり、もし一カ月ごとに発達偏差値をだすと、理論上は正しくても、実際に使用者が使う場合に誤解するおそれがあるので、六カ月ごとに発達偏差値を算出するようにした。算出は、次の式によった。

$$\text{発達偏差値} = \frac{x - \bar{x}}{s} \times 10 + 50$$

\bar{x} = 被験者の得点

x = 被験者とおなじ生活年齢の幼児の得点の算術平均値

s = 被験者とおなじ生活年齢の幼児の標準偏差値

発達指数の算出

発達指数の算出は、この調査の結果あらわれた問題の難易度からみて、適当でないと考えられるものもあったが、発達指数をだしておく、使用者に便利なおことがあるので、算出することにした。

$$\text{算出は、次の式によった。} \quad \text{発達指数} = \frac{\text{発達年齢}}{\text{生活年齢}} \times 100$$

倉橋惣三 著

子供讃歌

B 六 三四頁 定価二六〇円 丁二四

内山憲尙 著
インドのお話集

あわてうさぎ

A 五 一七頁 定価二二〇円 丁二四

村上幸雄 編

幼児劇集 はるのひよこ

A 五 一七頁 定価二二〇円 丁二四

長田新 著

フレールベルに還れ

B 六 一九頁 定価二〇〇円 丁一六

落合聰三郎・周郷博 編

幼児劇集 たのしい劇あそび

A 五 三三頁 定価二八〇円 丁三三



株式会社

フレールベル館

東京都千代田区神田小川町2ノ5 電話東京 (29) 7781~7785 振替東京19640